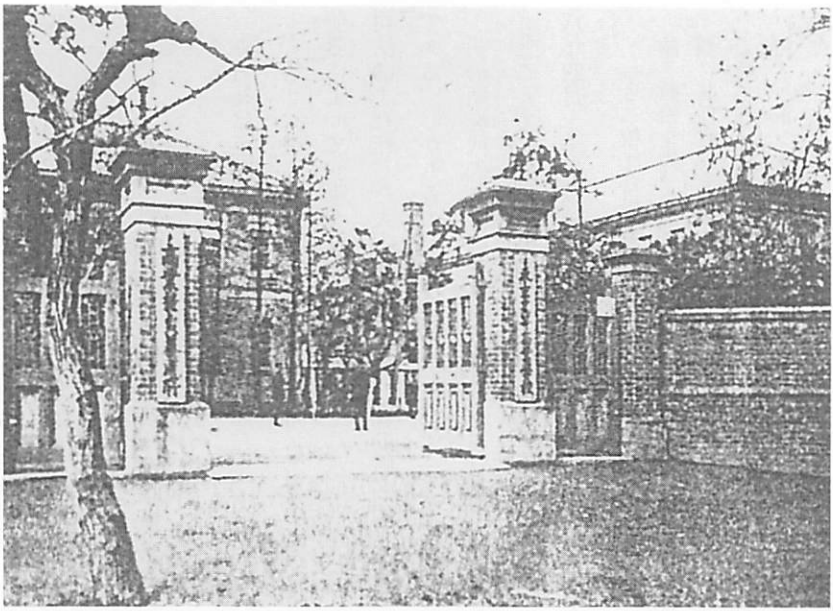
借家人の所へ這入り込んで各其姓を冒し恒武天皇より出たか清和天皇より出たか知らぬが此由緒正しき東京外国語学校という旧家、名門は一朝にして絶家の悲運に遭遇した」と。

五　外国語学校廃校の政治的背景

森有礼は英国駐在公使として欧州滞在中、一八八二（明治十五）年に憲法取り調べのために渡欧した伊藤博文とパリの客舎に会したとき、立憲政治を布くためには教育の普及発達が重要であることを説き、森の文部省入りはこの時伊藤によって約束されたのだった。一八八四年四月、帰国した森は予定どおり文部省入りする。時に文部卿は、前年司法卿より転じた大木喬任である。森の職名は文部省御用掛兼務だったが、実質的には文部省のナンバーツーの地位である。しかも森のバックには、渋沢栄一、益田鉄之助（後の第二代日銀総裁）、益田孝（東京会議所副会頭）という明治期を代表する実業家が、農商務省管轄の東京商業学校の校務商議員として控えていた。

ところでここに「外国語学校存廃ノコト」と題する五項目にわたる大木喬任のメモが残されている。このメモは一八八四年四月十一日以降に書かれたものと推定されるのだが、その第二項にはこう明記されていた。

「今二校ヲ合併スルニ当リ此ニ特ニ審議ヲ要スベキモノハ東京外国語学校ノ存廃ノ事ナリ、元来該外国語学校ハ広ク外国語ヲ教授シ大学其他専門学校ニ入ルベキ生徒ニ必要ナル外国語ノ予備ヲナスヲ以テ其重ナル目的トナシタルモノナリシガ、漸ク其性質ヲ変ジテ一両年前ヨリ其内ニ高等商業学校ヲ置キ商業上ノ学問ト外国ノ語学トヲ兼教スルノ有様トナレリ、故ニ当時ニ在リテ既ニ名ハ外国語学校ヲ本体トシ之ニ商業学校ヲ属スト雖ドモ其実ハ商業学校ヲ以テ旨トセシモノト云ハザルヲ得ズ、況ンヤ頃日ニ至リ仏独両語学ノ如キハ之ヲ予備門ニ移スノ議アレバ、唯其残ル所ハ露語漢語朝鮮語ノ如キ商業上ニ用



東京高等商業学校正門（元東京外国語学校正門）

フルニ非ンバ更ニ他ニ要用ヲ見ザルモノニシテ益々語学ハ商業ニ附属スルノ科業タルニ外ナラザルニ至ルベシ、既ニ其実此ノ如キニ至ルトキハ其名モ亦随テ正サザルヲ得ズ、故ニ東京外国語学校ノ名ヲ廃スルハ今日ニ在リテ止ム可カラザルモノトナルベシ」

（『商業教育の曙　下巻』［一橋大学百年通史稿本］一九九〇年）

東京外国語学校の解体、廃校に至るシナリオはこのように、周到かつ巧妙に意図されたものだったのである。どのような政治的駆引があったかは不明だが、このメモを見るかぎり、森と大木の間には、外語に高等商業学校が付設された段階で、すでに外語の廃校をめぐる合意がなされていたと考えざるを得ない。脱亜入欧を計る当時の官界、実業界の支配的傾向も、ここに如実に反映していたのであろう。

かくて両校合併後の校長には、旧東京商業学校の矢野二郎が留任、森有礼は同校の監督に就任する。また旧東京外国語学校校長の内村良蔵は文部省大書記官に転任し、

東京商業学校御用掛となる。しかも旧東京外国語学校の建物と敷地が東京商業学校に移管されたのである。

生徒の反応

この合併という名の廃校劇に憤慨して多くの教員、生徒が退官、退学したことはすでに触れたが、彼らの生の声をいくつか紹介することで本章の結びとしたい。

露語科から商業学校を卒業し、実業界に進み、東京海上専務、日本製鉄会長などを歴任、神戸の甲南学校（現甲南大学）を創立し、文部大臣になった平生（旧姓田中）釟三郎はこう記している。

母屋を取られて檐下に住んでいるような外語の残党は一向に冴えぬ気持ちで、娯しくもない正月を送った。その正月の月も終わりになろうとする二月二十九日、突如として真夏ならぬ真冬の寒天にこれはまたもの凄まじい霹靂が鳴り轟いた。「語学部は、政府の命令により、本日限りこれを閉鎖する。但し、明日は孝明天皇祭にて休校なれば明日中に退去しても差支えない。」これが室内体操場に集合した語学部学生の頭上へ、矢野二郎校長の投げつけた宣告であった。語学生の間にはたちまち名状しがたい絶望が一脈の殺気を呼び起こした。校長が素早く身を隠さなかったら、どうなったか分からない。対手が居ないと知れると、やがて怒罵が飛び憤叫が流れ、喧々囂々、ただ焦燥が渦巻くのみであった。

（前掲『平生釟三郎自伝』）

また満蒙独立運動を挙行したことで名高い旧松本藩士川島浪速もこの廃校に遭遇した。彼はその時の心境をつぎのように述べている。

……講習所から来た学生が本当の子供の様で、語学校より引続いた学生は継子扱ひの勢となり、俺共初め従来の学生が感情的に不平満々であった。併合した際自ら退校したものも少なくなかった。俺も勿論商業学などをやる考はなかったが、来

年まで支那語をやり、そして支那へ渡る考であった。

（『川島浪速翁』、大空社、一九九七年）

この川島は、明治三十三年の北清事変（義和団の乱の際、紫禁城の攻略を主張する日・英・露・独の連合軍に対し、単身、神武門を警備する禁衛将校と中国語で籠城の不利を説得し、その効あって無血開場を成し遂げることになる。清朝王族の粛親王は、この時の日本軍の処置と川島浪速の態度にひどく感激しこれが縁となって、粛親王は川島を生涯、顧問とするようになったという。

卒業を間近にひかえて、この廃校事件にあった長谷川辰之助（二葉亭四迷）の当時の心境は、親友の内田魯庵によってこう伝えられている。

当時の商業学校というは本は商法講習所と称し、主として商家の子弟を収容した今の乙種商業学校の頗る低級な学校だったから、士族気質のマダ失せない大多数の語学校生は突然の廃校命令に不平を勃発して、何の丁稚学校がという勢いで商業学校を睥睨した。今なら恁んな専制的命令が行われる筈もなく、然ういう場合学生は聯合して示威運動でもする処だが、当時の学生は尚だ然ういう政治運動をするような考えがなく、硬骨達が各自に思い思いに退学届を学校へ叩きつけてしまった。二葉亭四迷も亦其一人で、一時は商業学校に学籍を転じたが翌十九年一月、到底辛抱が仕切れないで怫然袂を払って退学してしまった。最う二三月辛抱すれば卒業できるのだし、二葉亭は同学中秀才だったから、其侭欠席して試験を受け付けないでも免状を与えようといふ校長の内諭もあったが、気に喰わない学校の卒業証明書を恩恵的に貰う必要は無いと、キビキビ跳付けてプイと退学して了った。

（内田魯庵『二葉亭四迷の一生』）

以上見てきたように、外語廃校事件は、舞台裏での周到な準備、画策があったとはいえ、当の教員、生徒たちにとっては、全く寝耳に水の暴挙と映ったのである。